

令和5年度 第6回 岐阜市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 令和6年1月29日（月）13時30分～15時30分
- 2 場 所 岐阜市庁舎 6階 6-1 大会議室
- 3 出席者 柴橋市長、水川教育長、武藤委員、伊藤委員、加藤委員、岡本委員
- 4 傍聴者 一般6名、報道関係者1名
- 5 次 第 (1) 市長あいさつ
(2) 協議

「主体的・対話的で深い学びの実現

～デジタル等多様な手段を駆使した学びの充実～」

「年間総括」

6 議 事

(13時30分開会)

(1) 市長あいさつ

(2) 協議

① 「主体的・対話的で深い学びの実現

～デジタル等多様な手段を駆使した学びの充実～」

ア 事務局説明

(資料1 「今年度のGIGAスクールの取組状況と今後について」)

イ 意見交換

○岡本委員

資料1の10ページにある重点校での授業研究・実践では、具体的にどのような取組を行い、どのような成果があり、どのような課題がみえてきたか。

○事務局

重点校の4校では、ロイロノートの活用を中心に取組が進められている。例えば社会科では、子どもたちがロイロノートに考えを入力することで、瞬時にクラス全員の考えを把握でき、そこから交流を図ることで考えを深めるといった取組がなされている。課題としては、どのような教科、学習内容での活用が効果的かを更に精査していくことだと考えている。

○岡本委員

意見をなかなか入力できない子もいると思うが、そうした子への対応はどうしているのか。また、他の子よりも早く終わってしまう子に対して、次の学びに向かえる取組がなされるとよいと思う。

○事務局

教員が個別に声をかける等、配慮しながら取組を進めている。他の子よりも早く終わってしまう子への対応については、課題であると捉えている。発展的な学習の提供や発表内容のクオリティを上げるよう促しているが、場合によっては、スタディサプリを用いた個別学習も可能である。

○加藤委員

学びの進み具合は、子ども一人ひとり様々で、非常に幅がある。個別最適な学びをどこまで提供できるのか、とても難しい問題だと感じている。これまでの学びを8ページにあるような学びに全て転換するのではなく、ハイブリットな学びを展開していくべきだと思う。インプットができていないのにアウトプ

ットはできない。また、一斉授業のほうが合う子もいるだろう。多様な子ども一人ひとりのモチベーションをいかに引き出すかが重要である。その点で、教員がコーチングの視点を持つことはとても大事である。コーチングを行う中で、子ども一人ひとりにとってどのような学び方が適しているのか、見極めて実践していく必要があると思う。

○武藤委員

取り残されがちな子に対する教員の支援はもちろん必要だが、子どもたちが共同の学びの中で、助け合って皆で乗り越えていくことも大事ではないかと思う。子どもたちのITスキルが非常に高いことを皆さんも実感したことがあると思うが、そうした力を活かしつつ、教員も適切な配慮に努め、進めていくとよいと思う。

○伊藤委員

保護者として、ロイロノートの活用等、一人一台端末の活用を積極的に進められていると感じている。以前に比べ、充電の頻度もとても上がっている。私の子どもが通う学校では宿題がないのだが、家庭での学習を把握することにも使われている。私が外部講師として授業に参加した際も、子どもたちが文房具の一つとして自然に使っている様子を見ることができた。

保護者として感じていることを4点話したい。

1点目は、一人一台端末の長時間使用による影響である。姿勢や視力の悪化、ブルーライトによる睡眠障害を懸念している。将来的に自らの健康を守っていくためにも、こうしたものを未然に防ぐトレーニング方法を学校で教える必要があると思う。

2点目は、学びの評価方法についてである。学びのプロセスを大きく変えていこうとしているのだが、出口であるテストや入試の方法がこれまで通りでは、

本質的に変わっていかないのではないかと。保護者はどうしても評価が気になる。教員の働き方改革と逆行してはならないが、個別最適な学びだけでなく、個別最適な評価方法についても検討していかなければならないと思う。

3点目は、読書時間についてである。一人一台端末による動画視聴の増加に伴って、読書時間が減少しているように感じる。ぎふMIRAI 'sにも通じるが、伝記や小説等を読み、他国や昔の人の生き方に触れることが人生に厚みをもたらすものである。子どもたちの読書の機会を増やす必要があると思う。

4点目は、不登校の子の出席の扱いについてである。メタバースを活用した支援の実施はとてもよいことだと思っているが、こうした学校外での学びの結果や成果をどこまで成績として認めていくか、議論が必要ではないかと思う。

○水川教育長

GIGAスクールの推進は、ぎふMIRAI 'sや総合的ないじめ対策、不登校に関する施策等、学校を子どもたちにとってよりよい学び舎にしようと考えて行っている取組の一つである。ICT機器はあくまでもツールではあるが、これまでの学校現場に化学変化を起こすきっかけになったと強く感じている。学びの面で言えば、授業中に子どもが自分で調べる時間が保障されるようになったことや、これまで手を挙げていなかった子も含めた全ての子の意見が見えるようになり、協働的な学びが日常的に行われるようになったこと、毎時間の記録が自動的に残ることで、自らの学びをストーリーとして見るようになるようになったことは、非常に大きな変化だと思う。また、教師団のあり様にも変化が生まれてきている。これまでの若手とベテランは徒弟制度のような関係であったが、ICTの活用に向けた若手と経験豊富なベテランがフラットに近い関係で協働している様子がみられるようになった。

加藤委員からインプットとアウトプットの関係に関してご意見があったが、学びが豊かになればなるほど、子どもたちは「誰かに伝えたい」、「発信した

い」と思うものである。私は、発信したくなるかどうか学びの質を客観的に評価する一つの指標だと思っている。学びを見える化し、蓄積していくことで、自らの理解度が認識でき、それが自己評価につながり、さらに発信したくなることにつながるのである。

知恵だけが先行している部分については修正しつつ、大学との連携をさらに強化するとともに、小規模校つながる教室のような取組を日常化していくことが、新たな使い方を模索することにつながると思う。

○加藤委員

デジタル活用によって、相互性を持った学び等、これまでよりもさらに学びが充実し、教室の中の様子が変わってきていると感じるが、デジタルはツールに過ぎないということを忘れてはならない。心の健康アプリやオンラインフリースペースの活用が目的ではない。社会に出たときに、他者との関係を築けるようにすること、SOSを出せるようにすることが目的である。最終的には、子どもたちが生身の人間と、生の声でやりとりできるようにしていかなければならない。

働き方改革はよい方向に進んでいると感じているが、教員不足もあって、教員はまだまだ大変であると感じる。常に業務に優先順位をしっかりとつけて取り組むことが必要である。

過度な通信利用者への対応に関して、保護者から頭を悩ませていると伺った。低学年では自らをコントロールできずに使い過ぎてしまうことがある。保護者の言うことを聞かない子もいる。家庭での利用について、教育委員会である程度方針を決められないだろうか。

学習データ等の活用について、正しく利用すれば非常に有益なものとなるが、個人情報保護に関する検討も必要である。また、得られたデータをリスク予知へ活用することも今後考えられるとのことだったが、予知後の対応方法につい

でも確立していく必要がある。リスクを予知し、しっかりと対応して初めて意味があるのである。

○事務局

岐阜市では、家庭への一人一台端末の持ち帰りを推奨している。過度の通信利用者のうち、不必要な通信が多い子に対しては、ダメな理由を考えさせ、自律できるような指導に努めている。

○岡本委員

デジタルの有効活用を模索する中で、若手とベテランの教員それぞれの特徴を活かした協働が見られるようになったと教育長が仰っていたが、既に導入されているデジタルプラットフォームを活用すれば、授業研究や悩み相談、事例紹介・交流等、他校も含めた幅広い協働ができるのではないかと。子どもたちの活用は進んでいるが、教員の活用について、更なる検討が必要ではないか。

ハラスメントに関する世の中の認識の変化により、仕事に限らず、例えば忘年会の幹事等、社会人として経験させたい様々なことをやらせにくくなっていると感じる。立候補制にすれば、よく手を挙げる方だけが経験を積んでいき、そうでない方が取り残されていく。こうした方が今後増えていくのではないかと危惧している。学校においても、自由や自主性を重んじることは必要だが、最低限の学力や資質・能力を担保した上で、こうした部分を伸ばしていくことが必要ではないか。

○水川教育長

岡本委員が仰った、教員の広場のようなものはとてもよいと思っているが、勤務時間との兼ね合いなど、整理しなければならない部分もある。個別にグループをつくって取り組んでいる教員もいるが、岐阜市全体として取り組みたい

という現場の声が出てくるとよいと思っている。

I C Tを活用した学びに関して、白山小学校が面白い取組を行っている。私が北海道佐呂間町の教育長とつながったことをきっかけに、白山小学校が手を挙げて、佐呂間町の小学校との交流が始まった。交流に際し、白山小学校が事前に調べたところ、隣の北見市に岐阜という地名があることを見つけ、交流時の話題にしていたのだが、地名のつながりについて興味を持った子どもたちは、そこから発展させて、全国にある白山小学校が集う、白山小学校サミットを開催しようと動いている。また、その中で、東日本大震災で被災した宮城県釜石市の白山小学校とつながったことで、防災教育の充実にもつながっている。学校側である程度のコントロールは必要だろうが、校長以下教職員が柔らかい頭で子どもたちの思いを前向きに捉えていけば、子どもたちの興味や学びは無限に広がっていくのだと感じた。

○柴橋市長

加藤委員が仰った、インプットとアウトプットの関係についてである。インプットがなければ対話のしようがなく、その質は上がらないと思っている。座学による知識のインプットをしっかり行い、自分のものにした上で、仲間との交流や意見交換、ディスカッションをすることが大事である。私自身、日々アウトプットをする必要があるため、常に意識して世の中を見ているのだが、そうすることで自ずとインプットは増えていく。それは子どもたちの学びにも通ずるものがあると思う。発表する機会や仲間とディスカッションする機会があれば、「そこで何を伝えようか」という気持ちが生まれ、自ずとインプットは増えていくのではないか。目的もなくただ暗記するのではなく、アウトプットとインプットのハイブリッドな学びの楽しさを子どもたちにも味わってもらいたい。

毎年、タブレット端末で予算査定の膨大な資料に目を通すのだが、目の疲れ

や同じ姿勢が続くことによる体の固まり等を感じてかなり大変で、一人一台端末の活用が進み、デジタル教科書の導入も予定されている子どもたちも同じように感じていないかという趣旨の投稿をSNSにしたところ、比較的大きな反響があった。伊藤委員も仰っていたが、同じような問題意識をお持ちの方も一定数いるのだと感じた。子どもたちへの負荷という点も踏まえ、デジタルの活用場面を適切にマネジメントしていく必要があると思う。学校現場を見ていると、一人一台端末の活用が進み、子どもたちが使い方に慣れてきていると感じる。こうしたデジタルツールが自分の思いを他の人に伝えるための新たなきっかけになるということもあると思う。道具として、これからもぜひ活用に努めていただきたい。

第2回会議で招聘した妹尾様の著書を最近読んでいるのだが、コロナ禍での学校の一斉休業で、主体的な学びの重要性を皆が実感したはずだ。休業期間中、主体的に学びを継続できた子もいたが、なかなか自分の学びを深められなかった子も一定数いた。こうしたことから、我々はこれまで、主体的に学ぶ力を子どもたちにつけていくための議論を重ねてきた。GIGAスクール構想に基づく一人一台端末を活用した学びの充実もその一環である。コロナ禍の一斉休業から4年が経過し、子どもたちがどれだけ主体性を持って学びに向かっているのか、しっかり確認する必要があるのではないか。

我々の原点は、令和元年に発生したいじめ重大事態と、そこから作り上げた教育大綱にある。教職員が子どもたちとしっかり向き合い、対話できる時間を確保するため、働き方改革の一環で様々なツールを導入してきた。こうした取組により、どれだけ教職員が子どもたちと向き合えるようになったのか、原点に立ち返るという意味でも、しっかり確認すべき時期に来ているように思う。

② 「年間総括」

ア 事務局説明

(資料2「今年度の総合教育会議における協議振り返り及び協議成果について」)

イ 意見交換

○武藤委員

総合教育会議での協議に基づいて、具体的な施策に落とし込み、実現に向けて検討を進めていただいている事項がいくつもあり、ここでの議論がしっかりと活かされていることが実感できる。

次年度は、義務教育学校と部活動の地域移行に関する議論が必要ではないか。

義務教育学校的具体像をこれから決めていくことになると思うが、これまでの成果や知見を踏まえ、どのような学校を目指していくかの議論が必要になるだろう。また、市全体としてレベルアップするためにも、この義務教育学校で得られる知見やノウハウをいかにして他校へ広げていくか、整理、協議できるとよいと思う。

部活動の地域移行に向けて整備が進められているところだと思うが、実際の取組の中で生じる課題をしっかりと抽出し、どのような対策を講じていくか、議論が必要だと思う。

先ほどの市長の発言にもあったが、働き方改革の結果、教職員がどの程度子どもと向き合っているのか、どのような向き合い方をしているのか、具体的な検証が必要だと思う。

教育大綱の中に家庭の目指す姿も記載されている。一時に比べると、学校任せという印象は薄れてきたが、まだまだ家庭によって温度差があるように思う。あらためて、家庭の役割や家庭に対する学校の働きかけ、協働するための方策について具体的に考える場があってもよいと思う。

○伊藤委員

教員は、「子どものために」という思いで日々取り組んでいらっしゃる。「子どもたちと一緒にやりたい」、「子どもたちが分かる授業をつくりたい」という願いを持っているものの、他の校務が忙しく手が付けられないといった状況無くしていかなければならない。サービス業を営む会社の経営に携わっているのだが、働いている人の「お客様に喜んでもらいたい」という思いを十分に表現できる時間を確保することが使命だと思っている。学校における業務について更に精査し、学校単独で決めづらいことについては、教育委員会が先頭に立って改革していく必要があると思う。コロナ禍を経て、教育格差が拡大しているように思うが、公教育だからこそ、全ての子どもたちに教育機会を確保していく必要がある。子どもたちの相対的貧困率は依然10%を超えている。教員が子どもたちの困っていることや悩んでいることにより早く気付くためには、豊かな共感力と素早い行動力が必要である。そうした対応の時間を確保するためにも、教職員の業務負担の軽減は必要だと思う。

草潤中学校の成果の横展開として校内フリースペースが今年度より5校に設置されたが、その5校以外の学校でも、独自に校内フリースペースのような部屋を設けている学校もある。そこを拠点に徐々に学校に通えるようになり、教室に戻ることができた子もいると聞いている。校内フリースペースはどの学校にも必要であり、設置や充実を図るための支援を早急に行う必要があると思う。

○加藤委員

不登校の高校生が増加傾向にあることが気になっている。発達外来にきた方の話を聞いていると、高校に不登校の原因があるのではなく、それまでに蓄積したものが閾値を超えたことで不適応を起こしている様子が見て取れる。小中学校では表面上何も問題ないようにみえた、頑張ってきた子がしんどくなっているのである。こうした子を無くすためには、学校自体が安全・安心を感じられる場所になっていくことが大事である。それは、子どもにとってだけでなく、

教員にとっても同じである。不登校対策も大事だが、不登校にならない方策も必要である。具体的には、従来の学校文化の見直しと自分自身を守る教育の実施が必要だと思う。自分自身を守るための教育としては、SOSを出す教育やNOと言えるような教育、性教育がある。心が安全でないと、好奇心がわいてこず、学びにも向かえないものである。学びに向かう土台づくりは、これまで家庭が担ってきたものだが、学校が担わなければならない時代になってきている。心や体の声を聴く練習が学校で必要になっていると思う。

不登校児童生徒の急増はやはり大きな課題だ。草潤中学校が開校してから3年が経とうとしており、全国的にも学びの多様化学校を設置する自治体が増えてきている。草潤中学校の取組の何がよかったのか、レジリエンス、生き抜く力をつけるために真に必要な取組は何なのか、この辺りで現状の取組を今一度検証することが必要だと思う。

目に見えないことを一生懸命見ながら学校をつくっていくことが大事である。

○岡本委員

学びの多様化は今後も重要なテーマだと思う。ぎふMIRAI 'sの充実や自然体験等、多様な体験の機会を更に設けることが必要だと思う。

今年度、部活動の地域移行と働き方改革について議論したが、子どもたちを育てていくために、学校を核とした学びのシステムにおいて、地域や社会、保護者がどのように関わっていくとよいか、その活用や協力、協働方法を考えていく必要があると思う。

また、今年度議論した幼小接続は印象に残っている。幼児教育施設と小学校の接続がスムーズになると、子どもたちは非常に小学校になじみやすくなる。小学校と中学校の壁だけでなく、幼児教育施設と小学校のつなぎ目をいかにシームレスにしていくかがこれから大事なことだと思う。

どれだけよいコンテンツを用意しても、子どもたちの心が学びに向かってい

なければ、十分な効果にはつながらない。子どもたちが自分自身を認め、自らの存在を大切に思えるような環境を、学校、家庭でつくっていく必要があると思う。そうした意味で、制度的に難しい面があるかもしれないが、通学区域の弾力化や教科の選択ができるようにすること等、個に応じた学びの環境を用意することについて、議論が必要ではないか。

○水川教育長

委員の話を伺って、真に子どもが大切にされる教育を岐阜市はしているのか、という点が非常に大事であると改めて感じた。

今年度の議論を通じて、学びの主体をいかに子どもへシフトしていくかという点が重要であり、自らが主体となって探究していく中で生き方について考える、という仕組みを学校に構築していかなければならないと感じた。それを実現するためには、一人一台端末を活用した、個の状況に応じた効率的な学習によって、一人ひとりが主体性を持って取り組める探究的な学びの時間を生みだしていくことが必要である。

学校を「明日もまた来たい学校」にしていくという点が、来年度も議論のベースになると思う。「明日もまた来たい学校」には、安心がなければならないし、学びがなければならない。学校のこれまでの仕組みに、新たな仕組みを加えていかなければならない。この新たな仕組みを模索する中で、草潤中学校や校内フリースペース、義務教育学校、小規模校つながる教室等に取り組んでいるが、「本当に学ぶ」とはどういうことなのか、さらに考えを深めていければと思う。スティーブ・ジョブズや伊能忠敬、本田宗一郎等、既存の学校システムに依らず、自らの学びのタイミングで必要な学びを選択してきた先人は数多くいる。自らが学びたいと感じている時が、最も学びが深まる時である。自らが知りたい、伝えたいと思える仕組みが学校には必要だと思う。自分で決める、決めたことをやってみる、振り返るということがこれからの学校教育の核にな

っていこうし、そのベースには、学校が誰にとっても居心地のよい場所であらねばならない。

○加藤委員

学習障害、特にディスレクシアの子どもたちの早期発見・支援が必要である。特に、全ての学習の基礎となるひらがなの習得に対する支援は重要である。ここでつまずいてしまうと、その後の学習についていけなくなってしまうからである。幼小が連携して取り組むことも必要かもしれない。

○柴橋市長

学習障害について、私も以前、支援を行っていたことがある。高学年の子であったが、九九がなかなか覚えられず、その子が好きだった絵を描くというところと結びつけて一緒に覚えたことを思い出した。一定数いるこうした子の学力を保障していくことは、まさに個別最適ではないかと感じた。

教育大綱を改定し、これまで様々な施策に取り組んできたが、これが具体的な成果につながっているかの検証が必要だろう。施策にトライ&エラーはつきものである。教育大綱の実現に向けたPDCAサイクルを総合教育会議で回している中で、来年度は委員の皆様と現在地を再確認し、その先に向けた改善点やよりよい取組について、積極的に議論を重ねたいと思う。

多様な学校形態ともつながるが、草潤中学校の今後の展開や校内フリースペースの拡充、メタバースの活用等、不登校児童生徒が増え続けている状況において、不登校対策は来年度も重要なテーマである。また、来年度は、義務教育学校の開校を見据えた年である。義務教育学校で見込まれる成果を最大化するための準備も大変重要だと思っている。こうした今日的な様々な課題を解決していける、未来の学校の理想像、あるべき姿をどのようにつくっていくか、具体的な議論もできるとよいと思っている。

総合教育会議を通じ、委員の皆様が子どもたちや教職員、保護者や地域の皆様に対して真剣な思いを持って議論し、具現化に向けて取り組んでいただいていることをひしひしと感じている。私も行政の立場から、岐阜市の代表として、施策を具現化できるよう予算編成に臨みたいと思っている。引き続き、お力添えをお願いしたい。

(15時30分閉会)